

発問の分類

発問の3つの類型

文章を検討するための発問という点から考えると、発問には3つの類型があります。

(1) 答えがある発問

一つは答えがある発問です。だれ、いつ、何を確かめる内容のものです。これは、文章を素直に読めば、答えがどこかにあります。正解か不正解かをはっきりさせる発問です。事柄の確かさを確認することが主な目的です。

(2) 気持ちや感想、様子を問う発問

二つめは、気持ちや感想、様子を問う発問です。「どのように思いますか。」「気持ちを考えましょう。」というように、見方や考え方を確かめることが目的なので、正解か不正解かの区別はあまりありません。考え方の方向が間違っていなければ、おおむね可とする場合が多いでしょう。

(3) 自らの考えを整理し、語や文章を関係づけて答えを導き出す発問

三つめは、自らの考えを整理し、語や文章を関係づけて答えを導き出すものです。「二つの文を比べましょう。」「考えのわけや根拠はどこですか。」など、自分の読み取りを明確にするために、語と語、文と文を関係づけて答えさせるのです。正解や不正解は、はっきりしませんが、考える道筋を論理的に説明したり、根拠となる語や文、文章を活用して、説明したり表現したりするので、考える力が育っていきます。この発問がうまく授業に機能すれば、子どもから「先生は、何が知りたいのですか。」と問われることはないでしょう。

授業は、発問の3つの類型をうまく組み合わせて構成するとわかりやすくなります。

発問の分類

読みの指導という立場から、発問を分類してみると、以下のようになります。

① 知識（用語・概念・表現されている事実）を問う発問

用語・概念・事実関係などの情報収集に関する事柄、認知、記憶

② 内容の解釈についての発問

表現されている内容の理解や解釈およびそれに基づく推論、分析－総合、収束－拡散

③ 批判や評価についての発問

一定の基準に基づいて妥当性・真偽を判断すること、鑑賞も含む、評価

分類基準の条件としては、読みの過程に応じたもの、その発問で要求されている子どもの反応の質的な違いが区別できるようなもの、分析する上で取り扱いやすいものなどがあります。